

活躍は、黒人にとっては真の能力評価を受けたことを意味しない。彼等はそのステレオタイプ化に反発して来た。いわんや、ハンチントンが説明した労働能率の人種別の違いは、まったく偏見にみちたエセ科学として非難されるべき見解以外の何のものでもなかった。今日、彼の説を正面から支持する者は少ないであろうが、黒人は白人や日本人より頭が悪く、かつ動物的と思いがちな人々はそれほど減っていないかもしれない。そうでなければ、『偏見の構造』（NHKブックス）に示される日本人の黒人嫌いは説明できない。

我々は限られた情報をもとにして、国、人種、民族、社会に一定のラベルを貼りがちである。一度ある先入観にとらわれてしまうと、情報はそれに合わせて取捨選択され、往々にして先入観を補強する。かくしてイタリア人はつねに陽気であり、サッカー気狂いで好色になる。インド人は皆やせ細っているが、ロシア人は中年になると例外なく太る。ユダヤ人と華僑は商売上手で富豪をたくさん作り、ポリネシア人はこれに反しのんびりしており、金持ちにも極貧にもならない生活を楽しんでいる。ソ連はすべてを秘密にし、他方、アメリカは何でも公表してしまう。このように書くとは極端になるが、我々の大部分は上記のステレオタイプ化を否定していないのである。そして、それらはすべて国民性や民族性に由来するとなっている。

私には、「国民性、民族性」は、「外人特有の」と同じくらい内容不明で、使用頻度が高いように思われる。これらの表現が登場すると、ある現象の起こる原因は説明されることなく、結論を出して話が終わることになる。日本人が万事控え目で議論を好まないのも、アメリカ人が強引に自己主張をするのも、ともに国民性の違いによると言える。多くの人が納得顔になる。納得してしまえば論を展開させる必要がない。国民性、民族性は便利な単語である。「何故日本は短い期間で先進国になったか。」「それは勤勉という日本人の民族性のお蔭である。」こんな簡単な話はない。

もちろん、ふつうの話はこれほど単純に進みはしない。けれども、注意深く聞いていると、結局はある単語に置き換えて言い直すだけで、論理的に話を発展させない類いの説明が多い。民族性とはそもそも何かを論じない型の会話が多すぎる。もし特定民族にある種の特徴があるとすれば、一体それは何故か、また、本当にそれが民族固有の特色なのかを吟味しなければならぬ。同様に地域性も、そもそも「地域性」と呼ぶに値いする内容かを疑ってよいと思う。「……性」とのあいまいな表現はできるだけ避けた方がよいかもしれない。この表現は、「男らしさ」、「女らしさ」と同様に固定観念にとらわれており、事実の深い分析を妨げることがある。

（東洋大学）

メキシコの官庁分散計画

大友 篤

昨年11月中旬から12月初旬にかけて、4度目のメキシコ旅行に出かけた。一昨年からスタートした国際協力事業団によるメキシコ人口計画プロジェクトの指導援助のためである。メキシコ大地震の後間もない時期であったので、まわりの人たちは大丈夫なのかと心配をしてくれたが、そのような大地震はしばらくあるまいとほとんど気かけずに出かけた。

メキシコ市は、地震後2か月そこそこののに、よく注意しないと、被害の状況を気付かないほど

復旧していた。しかも、地震前から、建築を途中でやめて崩れかかった建物が市内には点在していたので、私の眼には、地震の被害がほとんど映らなかった。しかし私が、これまで定宿にしていたホテルは、地震のため壁が落ちたため営業していないということで、ほかのホテルに泊ったことが、従来と比べて、勝手のちがう点であった。

地震の被害地は、日本でも報道されて多くの人が知っているように、メキシコ市のCBDに限定されており、郊外ではまったくといってよい

ほど被害はなかったという。メキシコ市に住む日本人の大多数が郊外に住んでいるので、ほとんど被害はなかったそうで、逆に、日本の新聞が非常に大げさな報道をしているのにおどろいたという。

日本では、あの当時、メキシコ全土にわたってパニック状態になったかのような印象を受けたが、現地ではきわめて局地的な被害であったわけである。このようなセンセーショナルな情報が流れてしまったのは、メキシコ市のCBDにある中央電話局の建物が倒壊して、正確な情報が、外部に流れなかったことが、最大の原因であったようである。

また、CBDにある官庁の建物の多くが、被害を受けたために、メキシコの中核管理機能が、一時、麻痺状態になったことも、その原因の一つである、といわれている。メキシコ政府は、メキシコ市への過度の人口集中や各種機能の集中が目立っているため、これらを抑止するため、かねてから、官庁分散計画をつくっていたが、大地震の発生をきっかけとして、この計画を早急に実施しようとしていた。

メキシコ人口計画プロジェクトを担当する国家人口評議会も分散の対象となっており、1年ぐらいの間に、メキシコ市から北西に約200km離れたケレタロ市に移転させられるということであった。とくに、官庁分散計画は、人口分散計画の一部として、メキシコ人口計画の一環として位置づけられているため、その主務官庁である国家人口評議会は率先して移転しなければならないとい

う。

一方、この人口計画のために基本的な人口データを供給しているメキシコ統計・地理情報局（日本の総務庁統計局と建設省国土地理院とを合体したような組織）も、メキシコ市から西に約500km離れたアグアスカリエンテス市に移転するということがあったが、たまたま、この市を訪れたところ、その新庁舎と職員住宅団地が建設中であつたのにはおどろかされた。この役所が移転すると、約2万人が増加するのだという。

通常、発展途上国では、計画ができて、その実施までには多くの年月を要するものであるが、メキシコの官庁分散計画の実施のスピードぶりにはおどろかされた。それを可能にしているのは、メキシコの土地の広さである。つまり、都市の周辺には、必要とあれば、直ぐに住宅団地や官庁団地となるような土地が容易に入手できるというメキシコならではの恵まれた条件があるからである。

この計画の実施にあたって、気がかりなのは、官庁（国の機関）が全国に分散した場合、いわゆる管理機能が分散してしまうということであり、国家行政の効率的な運営がはたしてできるのだろうかという点である。一方、このような分散が、メキシコにおける人口の地域分布や都市システムにどのような影響を与えることになるのかという点は、地理学的には、きわめて興味深いものがある。

（宇都宮大学）

じづきやま 地附山の地滑りについて

川崎逸郎

長野市の北、善光寺の裏山にある標高733mの地附山の斜面が崩壊し多量の岩塊と土砂は山麓にある老人ホームと住宅地を襲った。乗用車は潰されボールのように変形し住居は引き裂かれたようになっていた。多くの人命と財産が消えた。

「地附山地滑りの惨事」とマスコミは報道した。そして、何故惨事が防げなかったのか、山が動き

出す徴候はなかったのか、行政側の対応は……等々が論議され今日その結論は出ていないようである。

昨年の8月末と11月初め現地からの要請によって、地附山と周縁の地形・地質の調査と弾性波試験とボーリングデータから岩盤の状態を調べた。その結果次に記すようなことが考えられた。